『虎明本狂言集』における「思ふ」と「存ず」
―『虎明本狂言集』のコーパスデータを利用して―

渡辺由貴（国立国語研究所　コーパス開発センター）

Omou and *Zonzu* in *Toraakira-bon Kyogensyu* :Using Data from the Corpus of *Toraakira-bon Kyogensyu*

Yuki Watanabe (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

国立国語研究所で作成中の『虎明本狂言集』のコーパスデータ（整備中、2015 年公開予定）を利用し、『虎明本狂言集』の中で多く用いられている動詞「思ふ」「存ず」の使われ方を、主に話者の属性に注目して考察する。「思ふ」および「存ず」の使用の選択にあたっては、話者の属性やその聞手、さらには名乗りや独白といった場面の問題が関与していると考えられる。

１．目的と方法

動詞「存ず」は、「思ふ」の謙譲語、あるいはあらたまり語とされる。中世軍記物語では基本的に、文末表現「と存ず」は話手が聞手と同等以下の立場の時に、「と思ふ」は話手が聞手と同等以上の立場の時に使用される（渡辺 2011）。同じく中世語の資料である『虎明本狂言集』にも「思ふ」「存ず」が多く用いられているが、両表現の使用の選択にあたり、話者の属性はどのように関与しているのであろうか。

『虎明本狂言集』における「と思ふ」類の表現を扱った研究に村上(1993)がある。定型性の強い一曲の発端部における「ばや」（「ばやと存ずる」）に注目し、狂言の構成や類の面から整理したものである。また李（2006）は、特に名乗りの場面で多用される「ウ」と「ウと思う（存ずる）」の、意味的・機能的相違に焦点を当てたものである。穐田(1975)は、狂言等における待遇表現としての「存ず」について述べている。これらの研究をふまえつつ、名乗り以外の場面も含め、総合的・数量的に「思ふ」と「存ず」両表現について検討するために、国立国語研究所で作成中の『虎明本狂言集』のコーパスデータを利用し、動詞「思ふ」「存ず」の使われ方を、主に話者の情報に注目して考察する。

『虎明本狂言集』のコーパスデータは、大塚編（2006）を底本とするもので、2015 年公開予定である。整備中のデータであり、調査結果は 2014 年 7 月 28 日現在のものである。なお、話者情報については、本文内に話者が示されていない場合にも可能な限り付与されている（小林・市村 2013，p.328）。なお、底本における両動詞の表記は「思ふ」「存ず」であるが、本コーパスの語彙素の表記にあわせ、以降、「思う」「存ずる」と現代語の表記で示す。

２．考察

２．１．「思う」「存ずる」の使用状況の概略

表 1 に、『虎明本狂言集』のコーパスデータにおいて用いられている、品詞が「動詞 - 一般」

となっている語の粗頻度の上位 10 位を示す。「存ずる」が 3 位、「思う」が 7 位となっており、『虎明本狂言集』の中でどちらの動詞も多く用いられていることがわかる。また、表 2 に、語彙素「思う」「存ずる」の用例数を[本文種別]別に示す。「思う」は 524 例中 488 例（約 93%）が、「存ずる」は 735 例中 716 例（約 97%）が「会話」の用例である。

表 1　『虎明本狂言集』において用いられる「動詞-一般」（上位 10 位）

	語彙素	粗頻度
1	言う	3305
2	取る	796
3	存ずる	735
4	然る	627
5	持つ	619
6	聞く	588
7	思う	524
8	出でる	449
9	因る	381
10	仰せる	352

表 2「思う」「存ずる」の[本文種別]別用例数

語	ト書き	引用-会話指示	引用-典拠	引用-和歌	会話	注釈	総計
思う	5	24	2	1	488	4	524
存ずる	1	16			716	2	735
総計	6	40	2	1	1204	6	1259

表 3　「と思う」「と存ずる」の[本文種別]別用例数

行ラベル	ト書き	引用-会話指示	引用-典拠	会話	注釈	総計
と思う	4	19	1	340	2	366
と存ずる	1	6		523	1	531
総計	5	25	1	863	3	897

ただし、「存ずる」の用例数には、「知る」の謙譲語としての用例が含まれているので、動詞「思う」との比較のため、ト格をとる（“語彙素「と」＋語彙素「思う」”、“語彙素「と」＋語彙素「存ずる」”）形について、表 2 と同様の調査をした（表 3）。「と思う」は 366 例中 340 例（約 93%）、「と存ずる」は 531 例中 523 例（約 98%）が「会話」の用例であった。

表 4「と思う」の話者（上位 30 名）

話者	用例数	話者	用例数
大名	35	亭主	4
主	32	次郎冠者	4
太郎冠者	31	武悪	4
夫	20	丹波	3
妻	19	見付の者	3
祖父	12	下京の女	3
出家	11	猿引	3
女	10	貸手	3
住持	9	柿主	3
果報者	8	男一	3
吉田の何某	7	継母	3
伯父	5	麻生	3
山伏	5	舅	3
教え手	5	勾当	3
おこ	4	山賊	3
鬼	4	新発意	3
すつぱ	4		

表 5「と存ずる」の話者（上位 30 名）

話者	用例数	話者	用例数
太郎冠者	58	亭主	5
主	49	果報者	5
出家	24	博打打	5
夫	22	牛博労	5
男	18	何某	5
聟	18	吉田の何某	4
大名	11	通行人	4
女	10	兄	4
甥	11	厳島の社人一	4
田舎者	8	所の者	4
妻	8	参詣人一	4
男一	8	伯蔵主	4
住持	7	猿引	4
閻魔王	7	舅	4
すつぱ	6	柑子売	4
孫一	6	見付の者	4
浅鍋売	6		

表 4・表 5 に、「と思う」「と存ず」を使用する人物上位 30 名を、[話者]情報をもとに示す。「と思う」のみを多用する「祖父」「教え手」、「と存ずる」のみを多用する「聟」「甥」「田舎者」等、その使用が偏っている人物が存在する一方、「大名」「主」「太郎冠者」「妻」「出家」等は、両表現とも多用している。次節以降、両表現の使用状況をいくつかの観点からみていく。

２．２．「と思う」のみを多用する話者・「と存ずる」のみを多用する話者について

「と思う」のみを多く使用する話者の特徴をみるため、表 4 のみにあがった話者について、「と存ずる」の使用数をあげ、「と思う」「と存ずる」の用例数の合計のうち、「と思う」の使用率が何％であるかを表 6 に示した。同様に、表 5 のみにあがった話者について、「と存ずる」の使用率を表 7 に示した。それぞれについて、２．２．１．および２．２．２．で確認する。

表 6　表 4 のみにあがった話者の「と思う」使用率

話者	と思う	と存ずる	「と思う」率（％）
祖父	12	0	100
伯父	5	1	83.3
山伏	5	3	62.5
教え手	5	0	100
おこ	4	3	57.1
鬼	4	1	80
次郎冠者	4	0	100
武悪	4	0	100
丹波	3	3	50
下京の女	3	3	50
貸手	3	1	75
柿主	3	1	75
継母	3	0	100
麻生	3	1	75
勾当	3	3	50
山賊	3	2	60
新発意	3	1	75

表 7　表 5 のみにあがった話者の「と存ずる」使用率

話者	と存ずる	と思う	「と存ずる」率（％）
聟	18	0	100
甥	11	0	100
田舎者	8	0	100
閻魔王	7	0	100
孫一	6	1	85.7
浅鍋売	6	1	85.7
博打打	5	0	100
牛博労	5	1	83.3
何某	5	2	71.4
通行人	4	0	100
兄	4	2	66.7
厳島の社人一	4	0	100
所の者	4	1	80
参詣人一	4	0	100
伯蔵主	4	2	66.7
柑子売	4	0	100

＊「男」は表 5 のみにあがっていたが、表 4 の「男一」と同等に扱うこととし、表 7 にはあげなかった。

２．２．１．「と思う」のみを多用する話者

「と思う」を使用するが「と存ずる」を使用しない人物として、「祖父」「教え手」「次郎冠者」「武悪」「継母」がいる。話手が聞手と同等以上の立場にある場合は「話手≧聞手」とし、話手が聞手より立場が低い場合は「話手＜聞手」として、詳細を表 8 に示した。なお、立場の高低は、主人と使用人のような明らかな上下関係があるか否かで判断した。

表 8　「と思う」のみを使用する人物

話者	名乗り	独白	話手≧聞手	（詳細）	話手＜聞手	一人称以外	用例数
祖父			11	孫一6、山伏（＝孫）5		1	12
教え手			5	聟4		1	5
次郎冠者			4	太郎冠者3		1	4
武悪			4	太郎冠者4			4
継母	3						3

「祖父」「教え手」については、その場面の中で高い立場にあるといえる。「祖父」の会話相手はいずれの曲においても「孫」である。同様に、「教え手」についても、聟に作法を教える人物であり、その場面において高い立場にある人物であるといえる。

「次郎冠者」および「武悪」は、立場の高い人物とはいえないが、聞手はそれぞれ同じく使

用人である「太郎冠者」であり、同等の立場の聞手に「と思う」を用いていることがわかる。

「継母」については、やや性格を異にし、「と思う」の 3 例はいずれも名乗りの場面の例である。名乗りの場面では「と存ずる」が多用されるが（村上 1993 等。２．４で後述）、「継母」は「と思ひ」「と思ひ候」を用いている。このような「と思ひ候」については２．５で述べる。

(1)わらはにもむすこが御入候へども、中／＼てうあひもなく候程に、きやうの殿をにくし／＼と思ひ候折節、寺よりくだりて候間、行人をかたらひいのりころして候、しがひをかくして候はば、ちちごの不審めされうずると思ひ、そのままおきて候、むなしくなりたるよし、ちちごに申さばやと思ひ候、いかに御入候か（ままこ　上 p.451）

２．２．２．「と存ずる」のみを多用する話者

「と存ずる」を使用するが「と思う」を使用しない人物として、「聟」「甥」「田舎者」等がいる。表 9 に、話手が聞手より立場が高い場合は「話手＞聞手」とし、話手が聞手と同等以下の立場にある場合は「話手≦聞手」として整理した。基本的には、「と存ずる」は名乗りもしくは独白、話手が聞手と同等以下の立場にある場合に用いられている。明らかに聞手より話手の立場が高い場合に「と存ずる」が使用されている例は今回の調査の範囲ではみられなかった。

表 9　「と存ずる」のみを使用する人物

話者	名乗り	独白	話手＞聞手	話手≦聞手	（詳細）	一人称以外	用例数
聟	8			10	教え手10		18
甥	4			7	伯父6、伯母1		11
田舎者	4			4	すっぱ3、目代1		8
閻魔王	5	1		1	朝比奈1		7
博打打	2			3	有徳人2、何某		5
通行人	3			1	菊一1		4
厳島の社人一	1			3	厳島の社人二3		4
参詣人一	2			2	参詣人二2		4
柑子売	2	1		1	亭主1		4

２．２．３．「と思う」のみを多用する話者・「と存ずる」のみを多用する話者のまとめ

基本的には話手が聞手と同等以上の立場の場合に「と思う」が用いられ、話手が聞手と同等以下の立場の場合に「と存ずる」が用いられる。これは中世軍記物語で見られる傾向と同様であるが（渡辺 2011）、「と思う」が特に失礼な表現であるというわけではなく、「と存ずる」というほぼ意味が同じでかつ謙譲・丁重の形式が多用されているために、高い立場の聞手に対し、敬語的ニュアンスを持たない「と思う」を使用しにくいのだと考えられる。

なお、話手と聞手の立場が同等の場合は、双方が「と思う」を使う例（太郎冠者と次郎冠者、太郎冠者と武悪）、双方が「と存ずる」を使う例（参詣人一と参詣人二）ともみられた。

２．３．「と思う」「と存ずる」両方を多用する話者について

表 10　「と思う」「と存ずる」とも 10 例以上使用する話者

話者	と思う	と存ずる	合計
太郎冠者	31	58	89
主	32	49	81
大名	35	11	46
夫	20	22	42
出家	11	24	35
女	10	10	20

次に、「と思う」「と存ずる」のどちらも 10 例以上の使用例がある、「大名」「主」「太郎冠者」「夫」「出家」「女」について検討したい。表 10 に、それぞれの人物の「と思う」「と存ずる」の用例数をあげる。また、詳細をみるため、上記の 6 話者の「と思う」「と存ずる」の使用場面を表 11・12 に示す。

表 11　話者別「と思う」の使用場面

話者	と思う							
	名乗り	独白	次第	話手≧聞手	聞手の内訳	話手＜聞手	一人称以外	合計
太郎冠者		8		8	売り手1、次郎冠者3、武悪4	3	12	31
主				23	太郎冠者22、太郎冠者・次郎冠者1		9	32
大名	1			24	太郎冠者19、女2、昆布売2、下人1		10	35
夫	1			13	妻10、告げ手2、妻・出家1		6	20
出家		5	2	3	所の者1、蛸の精1		1	11
女	2	1		3	大名1、新発意1、山賊1		4	10

「と思う」については、話手が聞手と同等以上の立場にある場合に用いられていることが多い。なお、表 11 をみると、「太郎冠者」に「話手＜聞手」の例が 3 例みられるが、いずれも鬼・小名類の例で、「主」に対し失敗の言い訳をする場面において、「と思ふ（ひ）て」の形であらわれる。高い立場の聞手に対して文末終止形の「と思う」を使用した例はみられなかったが、「と思ひて、」のように、文末以外の形であれば、高い立場の聞き手に対して「と思う」を使用しにくいという制限が弱まるのだと考えられる。

(2)私は又、かねの音をきひてこひと仰られた程に、それかと思ふてきゐて参つた、それならばそれととう仰られひで（栗やき　上 p.581）

表 12　話者別「と存ずる」の使用場面

話者	と存ずる							
	名乗り	独白	次第	話手＞聞手	話手≦聞手	聞手の内訳	一人称以外	合計
太郎冠者		9			48	主22、大名18、売り手3、次郎冠者1、仲裁人1、妻1、新座の者1、客人1	1	58
主	34	8		3	3	客人一2、仲裁人1	1	49
大名	8			1	2	女2		11
夫	12	2		1	7	出家4、妻1、仲人1、仲裁人1		22
出家	22	2						24
女	7	1			2	大名1、男1		10

一方「と存ずる」は、聞手が話手と同等以上の立場にある場合に用いられることが多い。表 12 には「話手＞聞手」の例が 5 例（「主」3 例、「大名」1 例、「夫」1 例）みられるが、いずれも「太郎冠者」に対して「と存ずる」が使われる例である。うち 4 例は(3)のように富士や鞍馬への参詣の話という共通点があり、あらたまった口調になっている背景として、神仏への畏怖の気持ちが影響していよう。穐田（1975，p.4）にも「場面的存在としての『神仏』に対する態度が、下位者である聞手に対しても向けられる」例について述べられている。

(3)「近比めでたひ、此福を某がとらふとぞんずる「某にもふくを下された「それはもろともにめでたうござる（くらままいり　上 p.527）

もう 1 例は、話手が「夫」、聞手が「太郎冠者」ではあるが、実は太郎冠者になりすました「妻」が聞手という例であり、対象は神仏ではなく妻であるが、恐れの気持ちが背景にある点で(3)と類似している。

(4)しぜん山のかみがそのふみをみたらば、なふ中／＼ただはおくまひとぞんじて（はな

ご　下 p.64）

このように、「と思う」「と存ずる」両表現とも多く使う話者であっても、特定の状況以外では、「と思う」は話手と同等以下の立場の聞手に対して用いられ、「と存ずる」は話手と同等以上の立場の聞手に対して用いられることがわかる。

２．４．名乗り・独白について

「と存ずる」については名乗りの場面での使用例が多いことも注目される。例えば、表 11・表 12 をみると、「と思う」を名乗りの場面で使用しているのは「大名」「夫」「女」の計 4 例であるのに対し、「と存ずる」を名乗りの場面で使用しているのは「太郎冠者」以外の 5 人物、計 83 例と多い。この名乗りの場面における「と存ずる」は、登場人物に対してではなく、観客への配慮として用いられていると考えられる[1]。例えば(5)の例では、新しい者を雇おうとしている件について、「大名」が名乗りとしては「と存ずる」を用い、直後に「太郎冠者」への発話で「と思う」を用いるという使い分けがみられる。

(5)新座の者をあまたおいてつかはふと存る、あるかやい　「お前に　「ねんなうはやかつた、汝がよろこぶ事がある　「いかやうな事でござるぞ　「汝一人にてはわれもめいわくにあらふず、身共もつかひたらぬ程に、新座の者をおいてつかはふと思ふがよからふか（鼻取りずまふ　上 p.192）

また、独白については、「と思う」「と存ずる」両表現ともみられる。(6)は独白の例であるが、独白であれば聞手はいないので、本来「と存ずる」のような配慮表現は不要であるが、これも名乗りと同様、観客への配慮として用いられているものであると考えられる。

(6)「太郎くわじやを留守においてござるが、何といたひているぞ　やうすを見うと存る、あらきどくや、　おくびやうなやつじやがきどくに夜まはりをするよ、(くいか人か　上 p.592）

なお、李（2006，p.62）に、名乗りや独白において、「『ウと思う』系は『ウと存ずる』あるいは『ばやと存ずる』のような敬語の形を取る。独白の時も、観客を聞き手として想定しているため、独白に「ウと思う」がその形式のまま使われることはない。」とある。実際は、「ウと思う」に限らず、聞手の存在しない場面において「と思う」が使われる際は、(7)のように「思ふたれば」「おもふが」等、文中の形式か、「候」がついた「と思ひ候」の形であり、敬語を伴わない文末終止形の「と思う」の用例は見られなかった。

(7)「言語道断の事じや、誠になくかと思ふたれば、そばに水ををひて目へぬる、扨々にくひ事じや、此よしたのふだ人に申さう（すみぬり　上 p.185）

なお、名乗りは狂言に特徴的なものであるが、中世軍記物語においても、聞手が多数いる公の場面で、行動予定を提示する「と存ずる」の形式が見られ、狂言における名乗りの形式と類似している（渡辺 2011，p.39）。

(8)進出て申けるは、「縦守殿は退給とも、維行は罷留りて、八郎殿の大矢をあたりてみんと存候。(略)」(話手：山田小三郎維行／聞手：多数　『保元物語』金刀本　p.101)

---

[1] 村上（1993）でも、一曲の発端部における「ばや」の用法を検討し、「にて候…ばやと候」「にて候…ばやと存る」等の形式は「観客への極めて高い配慮を示す表現」であるとしている。また、「でござる…うと存る」(「観客に対する配慮の表現として標準的なもの」)」「ぢゃ…う(「観客に対する配慮を表す表現のなかで最も低く、くだけた表現」)」等、五つの段階が認められ、虎明はこれらの段階を意図的に用いているとしている（p.570・p.576）。

２．５．「と思い候」について

ここまで「と思う」と「と存ずる」についてみてきたが、「と思う」に「候」がついた形式と、「と存ずる」には違いがあるのか考えてみたい。“語彙素「と」＋「思う」＋「候う」”で検索した結果は 13 例で、[本文種別]が「会話」の用例は、「出家」5 例、「継母」2 例、「女」「妻」「若市」「ごぜ」それぞれ 1 例であった[2]。いずれも名乗りの場面において用いられていた[3]。「と思い候」の話者は、「出家」を除いていずれも女性であることから、女性は「存ずる」よりも「思う」を使う傾向があった可能性がある。女性話者による「と思う」「と存ずる」の使用を表 13 に示す。

表 13　女性話者による「と思う」「と存ずる」

話者	と思う	と存ずる
妻	19	8
女	10	11
継母	3	
下京の女	3	3
若市	2	
尼	2	
上京の女	2	1
お寮	1	
女房	1	
伯母	1	
後家	1	1
ごぜ	1	
合計	46	24

「妻」「女」等、女性話者が「と存ずる」を使用する例も少なくないが、合計数では「と思う」の方が多い。表 3 で、会話における「と思う」が 340 例、「と存ずる」が 523 例であったこと、つまり全体では「と存ずる」の方が約 1.5 倍多くみられたことと比較すると、女性は「と存ずる」より「と思う」を使いやすいようである[4]。なお、大塚編（2006，下 p.69 注）に「虎明本ではサウラフの表記は多く『候』と漢字表記であるが、この場合のように女性のせりふ中では仮名表記にする傾向がある。」とあるように、女性の発話については意識な書き分けがなされていたようであり、「と思う」「と存ずる」の使い分けにもこのような意識があらわれているのではないだろうか。

「と思い候」は女性が使いやすい表現であることが推測されるが、待遇面ではどのようにとらえるべきであろうか。ここで、台本に書き入れられた「注釈」における「と思い候」の例についても考えてみたい。注釈において、「と思い候」の用例は(9)の例のみであったが、「とをもひ候」と「と存候」を続けて使用している。

(9)をぢさせられなと云て、つめたるがましかとをもひ候「惣じて、拍子物も、又かやうのたぐひも、うりてささやきおしへたるがましかと存候（よろい　上 p.68）

---

[2]他に、「注釈」「引用 - 典拠」「引用 - 会話指示」が 1 例ずつあった。
[3]村上（1993，p.577）の「『と思ひさふらふ』の話手はすべて女で、鬼の継子、石神、若市、瞽女座頭に用いられている。『と思ひ候』六例のうち五例は祐善・蝉・栄螺の出家に、もう一例は継子の継母の科白に用いられている。」という調査結果と同様である。
[4]なお、中世軍記物語においても、母娘間等、女性同士の発話では文末表現「と存ずる」の使用が確認できなかった（渡辺 2011，p.40）。

これらは台本を読む者に対する配慮表現であろうが、このように二つの表現が続けて使われている例があること、また、基本的には「と存ずる」が使われる名乗りの場面で「と思い候」の形がみられることをあわせて考えると、「候」のついた「と思い候」は丁寧な形式であり、「と存じ候」とも待遇面では大きな差はないと考えてよいかと思われる。

３．おわりに

『虎明本狂言集』における「思う」「存ずる」の使用の選択にあたっては、話者・聞手の属性が関与している。ト格をとる形式についてみてみると、基本的には話手の立場が聞手と同等以下の場合は「と存ずる」が、話手の立場が聞手と同等以上の場合は「と思う」が用いられる。また、観客への配慮表現として、名乗りや独白等の場面においても「と存ずる」が用いられることが多い。

このように目上の聞手（観客を含め）に対する発話で「と思う」があらわれにくいのは、「と存ずる」という謙譲・丁重の形式が多用されている中で、高い立場の聞手に対し、「と思う」をあえて選択し、使用することははばかられるためであると考えられる。なお、「と思い候」のように丁寧語化された形式であっても、女性による名乗りや注釈等、限られた範囲にしかあらわれない。ただし、「と思ひて」のように、文末形式以外の形であれば、「と思う」を目上の聞手に対して使用しにくいという制限は弱まるようである。なお、男性話者に比べ女性話者は「と思う」を使用する傾向があり、これも「と思う」の特徴といえる。

付記

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」（プロジェクトリーダー：田中牧郎）による成果の一部である。

参考資料・文献

大塚光信編(2006)『大蔵虎明能狂言集　翻刻　註解』上・下　清文堂出版
永積安明・島田勇雄校注（1961）『日本古典文学大系 31 保元物語･平治物語』　岩波書店
穐田定樹(1975)「『存ず』について」，大谷女子大学紀要，9，pp.1-19
小林正行・市村太郎(2013)「『虎明本狂言集』コーパスの構造化―仕様と事例の検討―」，第３回コーパス日本語学ワークショップ予稿集，pp.323-332
村上昭子(1993)「『大蔵虎明本狂言集』における終助詞『ばや』について」『小松英雄博士退官記念　日本語学論集』pp.555-578　三省堂
李淑姫(2006)「虎明本狂言集における『ウと思う』の用法―推量・意志の助動詞「ウ」との比較―」，日本學報，68，pp.55-67
渡辺由貴(2011)「中世における文末表現『と思ふ』と『と存ず』」，早稲田日本語研究，20，pp.34-45